

海の向こうにでて見れば

(7)「正義」と「力（ちから）」

石田 佳子

日本で暮らしていた時、私は「正義」と「力」を相反するもののように感じていました。（「盗むな」「殺すな」は当然の事として）男女平等や機会均等や人権尊重といった概念を「正義」（普遍的で基本的な考え方）と捉え、経済的、集团的、肉体的な「力（権力、経済力、集団圧力、暴力など）」の強弱に与するのを恥ずべきこととっていたからです。しかし、海外で暮らすようになってから、「正義」も「力」も状況によって変質するものだと思うようになりました。これは私の個人的な意見に過ぎませんが、今回はなぜ私の中でこのような変化が起きたのか、「正義」と「力」の関係は実際どうなっているのかについて考えてみます。

「正義」の意味

数年前に通っていた英会話学校でのことです。小さな教室には、マレーシア、中国、韓国、サウジアラビア、日本などを母国とする者たちが、各一名ずつ出席してアメリカ人の先生が提供する様々な話題について意見を交換していました。ある時、ふと会話が途切れて奇妙な空気が流れました。その理由は、先生が「mob justice（集団制裁、公開処刑）は、正しいと思うかい？」と尋ねたからです。一人ずつ促されて口を開くと、それを容認する意見が多かったので、私は驚きました。結局、「民意はデマなどで煽られ易く、常に正しいとは限らないから、罪を裁くのは司法に任せるべきだと思う」と主張したのは、日本人の私だけだったと記憶しています。（言うまでもなく、この例はサンプル数が少なく偏っているため、各国人の総意とは言えません。また年代や英語力にばらつきがあるため、皆が同じ状況を思い浮かべていたかは疑問です。つまり私の個人的な体験に過ぎない訳ですが。。）それまで私は単純に「正義というのは皆が共有している考え方だ」「その場の空気や状況によって変えてはならないものだ」と信じていました。しかし、その時から「本当に（現実には）そうだろうか？」という疑問を抱いたのです。

考えてみれば、司法制度や警察などが一民主主義の視点から見ての「正義」に基づいて機能しているとは、言いきれない国もあるのです。そのような国の人たちが、何を「正義」と捉えているか？誰をその担い手と感じているか？……と考えると、疑問は膨らむばかりです。

私の住む（東南アジアの中では先進国に近いとされる）マレーシアでも、交通違反を取り締まる警察官が賄賂を受け取る（or 要求する）ことなど日常茶飯事ですし、誘拐やひったくりや強盗（信号待ちの車にバイクで近寄り、車の窓を叩き割って助手席の鞆を持ち去る）事件が多発しています。数年前にはクアラルンプール南部の州で、連続下着泥棒が住民たちに捕まり、女物の下着を着せられ罵られてその動画をネットに晒されるという事件が起きました。それについて地元警察は、「リンチは許容しないが、事件が解決されたのは喜ばしい」と述べ、住民たちの行動を不問に付したそうです。たとえ大金が盗まれても、（警察に届けると面倒な書類を書かされるだけで）犯人逮捕はほとんど期待できない土地柄ですから、住民たちの行動はおそらく間違っていなかったのでしょう。被害を受けた側が「（警査に任せて）放置すれば、同じ犯行が繰り返されるだけだ」「それなら自分たちで何とかしよう！」と考えても不思議はない状況で、それを知る他の人々にも「そうしたくなる気持ちはわかる」「そうする方が、実効性のある正義だ！」と受け止められたのだらうと思います。

「正義」より「力」

より規制の緩い発展途上国では、政情不安定や貧しさなどから治安が悪化し、司法や警察が機能不全に陥っていることも少なくありません。悪い勢力が「力」を持てば、政治家や軍隊、司法、警察の関係者やジャーナリストといった「正義」を期待される職業に従事する者でも、「命懸けで対抗するか、馴れ合いの関係（賄賂や汚職）に甘んじるか」といった誘惑や葛藤に晒されることでしょう。後者を選ぶ者が増えれば、機能不全と治安の悪化に拍車がかかり、社会全体の「正義」はますます色褪せて行くでしょう。

「崩壊国家」と呼ばれる国ともなると、私たちの想像をはるかに超えた事態に陥ってしまいます。例えば、過激なテロ組織（ボコ・ハラム）が跋扈する西アフリカ（ナイジェリア）では、女生徒らが集団で拉致され、自爆テロや性奴隷に利用されました。また、麻薬カルテルが絶大な力を握る中南米（メキシコなど）では、対抗する者は誰でも（競合カルテルから政治家まで）残虐非道な方法で殲滅されるため、治安が極限まで悪化しているそうです。

「力」がものを言う弱者強食の世界では、（若い、貧しい、知力や体力が劣る、身寄りや後盾がないなど）力のない弱者たちは理不尽なまでに食べ物にされ、強者たちは何をして許されるのです。そこで弱者が「正義」を実現しようとしても、強者によって黙らせられ、潰されるだけですから、生半可なことでは「正義」を取り戻すことはできません。そのため、現行の悪い勢力を上回る、より強大な「力」で事態を変えてくれる“救世主”の出現が、望まれるのかもしれませんが。

それぞれの「正義？」

フィリピンのドゥテルテ大統領は、麻薬撲滅のための「超法規的措置」として、裁判にかけることなく麻薬関係者を殺害することを奨励しています。その結果、殺害されるのを恐れて自首した麻薬犯罪者や常習者で刑務所が満杯になり、冤罪や巻き添えや（口封じのための）仲間同士の殺人が激増し、国連などから「人権蹂躪」「大量虐殺」と抗議を受けています。にもかかわらず、国民からは「フィリピンの治安を良くするため、強い意思で犯罪組織と闘っている」として高い支持率を得ているのですから、「何が正義か？」「誰から見ての正義か？」という問題は、簡単には答えられない難問のように思われます。

先進国に住む私たちの「常識」では理解できない「正義？」に基づいて、刑罰などを実施している国もあります。例えば、アニミズムの盛んな土地（パプアニューギニアなど）では、現代においても魔女信仰が生きており、呪術で人を殺したと見なされた女性が（証拠などなくても、皆にそういう印象を持たれたら、断定されて）焼き殺される『魔女狩り』があるそうです。

イスラム法のシャリーアでは、（婚外の男女交際や同性愛、収賄など）「不道德な行ない」をした者に、群衆の目の前で鞭打ちの刑が与えられます。また、加害者を被害者と同じ目に遭わせるのが平等（『目には目を、歯には歯を』）と信じる人が多いため、相手を殴って失明させてしまった加害者の目を潰したり、（それが子どもであっても）泥棒した人間の手を切り落とすといった罰が与えられるそうです。

さらに、家長主義と男尊女卑の色濃い中東諸国（イラン、イラク、アフガニスタンなど）やインド圏（インド、パキスタン、バングラデシュなど）では、婚外性交や予期せぬ妊娠や（低カーストの男などと、親の反対する相手と）自由恋愛をした娘が「家名を穢した」として父や夫に殺される『名誉殺人』が容認されています。また、「求婚を断った」とか「（夫の浮気が原因で）離婚を言い出した」といった（逆恨みとしか思えない）理由で、女性の顔に強酸を浴びせる『アシッド・アタック』が横行しています。被害を受けた女性は死ぬこともあり、死に至らなくとも酸で焼け爛れた部位の痛みと変形に一生苦しむ

にもかかわらず、加害者の男性が権力や財力を持つ場合には、罰を免れ見逃されることもあるそうです。

日本の「正義」は、貴重品

現在、日本の社会では、男女平等や機会均等や人権尊重といった「正義」を重んじ、力の弱い者（子ども、女性、老人、病者、障害者など）に対する配慮や支援を当然のこととしています。しかし、そのような国であっても、いったん戦争に突入すれば、「正義」は吹き飛び、弱い者が「利用価値の乏しい者」として軽視され踏みにじられて行くことは、歴史の証明する事実です。戦争中は多くの国で女性たちがレイプされ、子どもたちは殺されるか兵士として使い捨てられて来ました。戦争という原始的な「力（暴力）」が支配する世界では、弱い者の声はかき消され、強い者の声だけが喧伝されて、「正義」は単なるプロパガンダ（宣伝文句）と墮すのです。

こうして見ると、私が日本に住んでいた時、所与のものであるかのように捉えていた「正義」は、平和で豊かな国だからこそ手にすることのできる「贅沢品」であり「貴重品」なのかもしれません。以前の私は、自ら努力して得たという自覚が乏しかったため、日本の「正義」のありがたさに気づくことが出来ませんでした。また、テロや戦争や命にかかわるほどの貧困といったニュースを見聞きしても、「遠い国での出来事」であり「現実味のわからない他人事」と感じてそれほど深刻に捉えることが出来ませんでした。

しかし、日本の外に身を置いて眺めると、日本に限らず多くの先進国で、（完璧とは言えなくとも）民主的な「正義」が実現しているのは、その社会全体に教育や医療や福祉を行き渡らせることのできるシステムと、それを裏づける経済力という巨大な「力」があるからだと思わざるを得ません。私たちは、平和で豊かな社会を当然のものとして楽観視するのではなく、より良い「正義」を実現するためには「力」をどう使うべきかを慎重に見定めながら、未来を自覚的に選びとらなければならないと考えます。